

月刊

2011

11
月号

みんぱく

特集 かんがえる足

ふしぎな足 野村雅一

「アルク」「ハシル」の認知と言語表現 今井むつみ

子どもの手足を形にのこす 伊藤由美子

雲南省大理盆地の靴の中敷 横山廣子

ハイヒールから透けて見えるもの—おしゃれか健康か 山本芳美

カラーワ—出家修行者のゲタ 三尾稔

水虫と日本精神 眞嶋亜有

イギリスの水虫論 保明綾

昆虫を追ってマレーシアへ通つようになつて四〇年以上になる。第二の故郷のような国である。毎年通えば、その変化には鈍感になる。今年はいつもと、ちよつと違つた旅を試してみた。昆虫撮影ではなく、ペナンにあるバタフライファームの開園二五周年記念式典に参加したのだ。

当初は海外の観光客が主な客層だったバタフライファームも、今は現地の人たちの入場者がずつと多い。年間三〇万人が訪れるという。この数は日本のどの昆虫館よりも多いだろう。ここでは私も少しばかり展示に協力している。写真コーナーもタッチパネルの液晶テレビが導入されて、見映えがするものになった。マネージャーを務めるのは開設者のデイビッドの息子、ジョセフ。世代交代が進んでいる。

イベントに訪れた人たちの中に、デジタル一眼レフを持った若い女性が多い。取材にきたマスコミかなと思つたら、その従業員たちだった。聞いてみれば、はやりのFaceBookに写真を載せるのに、一眼レフで撮つた方が綺麗だからという。

ペナンのジョージタウンは世界遺産に登録されている。歴史的な古い建物を利用したブチホテルも多い。その中でユネスコからも表彰されている、通称ブルーマンションというホテルに泊まってみた。中国の華僑で、現地の風

プロフィール
1947年東京に生まれる。昆虫を中心に撮影する自然写真家。
幼少期より昆虫に親しみ、学生時代に撮影した「スジグロシロチョウの交尾拒否行動」の写真が雑誌に掲載されたことを契機に、フリーの写真家の道を進む。著書『昆虫の癡惑』（平凡社）で1994年日本写真協会年度賞受賞。主な著作に『蝶の飛ぶ風景』（平凡社）、『蛾蝶記』（福音館書店）、『昆虫顔面図鑑』（実業之日本社）などがある。



マレーシア今昔

海野和男

習に適應し、中国本土よりイギリスとの関係を重視したというプラナカンの館である。古い建造物をホテルとして使うことで、維持管理しようという試みである。

部屋は広く、快適だ。こんな歴史的建造物に泊まれるとは素晴らしいと思ったのだけれど、三泊して二回もパーティーがあった。庭を貸し切つての生演奏付きの医者の集い。もう一日は内庭のような場所での同窓会。六〇過ぎの人たちが集まって、バンドを入れてのカラオケ。深夜まで続くのはちよつとまいつてしまった。もっともこんな建物があったら、ほくもパーティーに使つてみたいと思つたのだ。

四〇年来、毎年必ず行くカメロンハイランドではおかしなドイツ人に出会つた。ジープタイプのベンツに乗つていて、なにやらわけありげだ。連れていた犬の写真を撮らせてもらうことをきっかけに、少し話をした。ほくと同年代で、三国同盟の話などする。

どうやら戦後第一世代である。今はカメロンハイランドに住んでいるらしい。昔はよかつたという。「今はローカルが多くて」と嘆くのである。四〇年前にはヨーロッパ人の観光客しかいなかったカメロンハイランドは、今は現地の観光客でこつた返している。そして、そこに住む日本人も何百人もいる。時代は変わつてきているのである。

月刊 みんな

11月号目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
マレーシア今昔 海野 和男</p> <p>2 特集 かんがえる足
ふしぎな足 野村 雅一</p> <p>4 「アルク」「ハシル」の認知と言語表現 今井 むつみ</p> <p>5 子どもの手足を形にのこす 伊藤 由美子</p> <p>6 雲南省大理盆地の靴の中敷 横山 廣子</p> <p>7 ハイヒールから透けて見えるもの
——おしゃれか健康か 山本 芳美</p> <p>8 カラーウ——出家修行者のゲタ 三尾 稔</p> <p>8 水虫と日本精神 眞嶋 亜有</p> <p>9 イギリスの水虫論 保明 綾</p> <p>10 研究フォーラム
失われた共存の可能性を求めて
菅瀬 晶子</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 地球ミュージアム紀行
西洋の巨匠で飾られた南米の美の殿堂
チリ国立美術館
藤川 哲</p> <p>15 みんなく私の逸品
マツタロッカムイ（奥に座す神）
北原 次郎太</p> <p>16 散策と思索の径
南シナ海の東と西
本多 守</p> <p>18 多文化をささえる人びと
当たり前に語れる社会を作りたい
ベトナムルーツの子どもたちのかかわりから
朴 洋幸</p> <p>20 歳時世相篇
ニジェル河を泳いで渡る牛
竹沢 尚一郎</p> <p>22 フィールドで考える
失われた村を想い続ける66年——沖繩・嘉手納町
井口 淳子</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|

特集 かんだがえる足

ふしぎな足

野村雅一 民博名誉教授

人間ならではの足

手仕事、手作りなどよばれる人間の手がつくりだすものは、人間らしいものとして今もその価値をさげしていない。それは手が、人が二本足で立つて歩きはじめたとき、自由になった前足から生まれた人間性のひとつのあかしであるからと考えられている。しかし、厳密にいえばその見方は必ずしも正確ではない。立つことはなくても、ネコ、ネズミ、リス、クマなど、すわることのできるさまざまな動物は前足をかなり器用に用いる。霊長類となると、親指とほかの指の対向性など、手（前肢）は人間と非常によく似ている。形も機能もまったくちがって、人間に特異なのはむしろ足なのだ。

サルには「足」がないのである。それゆえ、フランスの先史人類学者のルロワールランなどはサル類を四足ならぬ四手類と名づける一方で、人間の足はサルの枝渡りよりクマの足裏歩行に向いているといい、これは進化の退行、後戻りを思わせるものべている。

そういわれてみると、人間の足は奇妙といわないまでも不思議な形をしている。これが一応の完成形なのか、それともいまだ変化の途上の一段階なのか問題だが、いずれにしてもあまり表舞台にだすようなものではないだろう。足がとかく低くみられるのはその位置のためばかりではないかもしれない。

忘れない足裏感覚

ともあれ、そんな足は隠すべきもので、他人にみせてはならないという社会も少なくない。西洋人の靴もともと足を隠すためなのか、歩く足を保護し、蹄のかわりに踵をつける一種の身体加工だったのかはつきりしないが、人前で靴を脱いで足をだすのは今もマナー以前の作法、ほとんどスキヤンダルだ。一九七〇年ごろ、イタリヤの片田舎の集落に靴作りの店があるのにおどろいて話をきくと、むかしは村々に靴屋がいたという。西洋人にとっては足は靴を履いてはじめて人前にだせるものになるのだろう。かつて中国の一部でおこなわれた纏足（てんそく）も思いたされるが、布帛で巻かれた女性の足はまさに秘所だった。

しかしながら、椅子などの補助具なしに地面や床にすわる坐位の技術をもつ多くの社会では、足は少なくとも生活の場ではいやしめられてはいない。ここではインドの足踏み包丁の例をあげるだけで十分だろう。台所の土間にしゃがんで、鎌に似た包丁の柄を右足で踏んで固定し、手前に向けて立つ刃に野菜や魚などを押しつけるようにして切る。食物の調理に足をかかわらせるのである。

こういう社会ではまた、地面や床を足で踏みしめ音を響かせる動作が特別な意味をもって重んじられ、芸能の基本のリズムをつくりだす。インドの舞踊のステップも、日本各地の冬の祭礼でダダオンなどとよばれる足踏みもそれである。

踏みしめる足裏感覚——靴を脱がないとどうしても落ち着かない日本人のことを考えても、これが文化伝統の最後の抛り所なのかもしれない。

歩くことと走ることはもともと基本的な移動手段であり、動作であり、それが文化普遍的であることに疑いはないだろう。ところで、足を動かして移動するという一連の動作を日本語ではアルクとハシルというふたつの語で分類するが、果たして他の言語でも、そうだろうか？

日本語のアルクとハシルをいっしょにしてしまいう言語、つまり「足で移動する動き」に対する語がひとつしかない言語を筆者は知らない。逆に足を使った移動の動作をもっと多くの動詞で区別する言語はたくさんある。一般に英語、ドイツ語などのゲルマン系の言語は細かい様態を多くの動詞で区別するが、フランス語、スペイン語などのロマンス系の言語はこのような様態の区別を動詞であまりしない。日本語はその意味でロマンス語に似ているが、動きをあらわす擬態語が豊富にあり、歩く動作も、「ちよこちよこ」「ずんずん」などと言いつけることができる。

異なる数

ウォーキングマシンの速度の設定を上げていくと自然に「アルク」動作から「ハシル」動作に変わっていく。筆者はこの速度を少しずつ上げていったとき、日本語、英語、オランダ語、スペイン語の話者がそれぞれの速度での動作をどのような動詞を使って表現するかを調べてみた。すると、使いつける動詞の数は、言語によって、かなり違うことがわかった。日本語が一番少なく、「歩く」と「走る」のふたつの動詞のみが用いられた。一方スペイン語は三つの動詞、英語は四つ(walk

「アルク」「ハシル」の認知と言語表現

今井 むつみ 慶應義塾大学教授

jog, run, sprint) オランダ語はもっとも多く、七つの動詞が使いつけられた。これだけから見ると言語はそれぞれ好きな細かさで足を使った移動動作を分割しているように見える。しかし、実際には四つの言語のあいだで非常に興味深い共通性も見られた。

まもられる境界

動詞の数がふたつしかない日本語では、アルクとハシルの境界は非常にはっきりしており、ほぼ全員が、ある一定の速度に達したときいきなり、アルクからハシルに切り替えた。英語話者とスペイン語話者は、日本語のアルクに相当する速度に対して、walk と canina をそれぞれ使っているが、日本語でアルクからハシル速度に変わったとたん、彼らも違う動詞に切り替わった。オランダ語は、日本語話者がアルクと表現した速度に対して四つの動詞を使いつけていたが、日本語のハシルに相当する速度に達したとき、やはり別の動詞に変わっていた。つまり、これらのことはでは日本語でアルク、ハシルに相当する表現をいくつに細分するかにおいては異なるが、日本語のアルクとハシルの境界は、どの言語でも同じ動詞がまたいで使われることはなかった。つまり、アルクとハシルの境界はまもられていたのである。

以上から、足を使って移動する一連の動作をどのくらい動詞によって細分し表現するかは言語により異なるが、アルクという動作とハシルという動作に本質的な違いがあり、どの言語の話者もその違いを知覚し、動詞により表現しわけていると考えられることができる。

子どもの手足を形にのこす

伊藤 由美子 青森県立郷土館学芸員

子どもが生まれて一歳前後になると、記念に子どもの手や足の形を色紙や粘土にとる。たいていは歩き始めたころにとる。人類が歩き始めてから遙かな時が経過したが、親にとって子どもが歩き始めることは偉大な進歩なのである。これと同じようなものが縄文時代にも造られていた。

手形・足形土製品、あるいは手形・足形付き土版とよばれるこの遺物は、今までに出土



した遺跡は二〇遺跡と少なく、地域も北海道・東北地方に偏る。造られた時期は北海道では早期(約六五〇〇年前)が多く、東北地方では後期(約三五〇〇年前)以降が多い。円形・楕円形の粘土板に、一〜二歳前後の乳幼児の手・足を押しつけて形をとって、手形より足形の出土数が多い。北海道美々七遺跡・柏木川四遺跡や青森県大石平遺跡などから出土した土版には、手・足の形をとった後に模様もつけられている。また土版の片端には一〜二つの小さい孔が開いていて、紐をおせるようになっていたりものあり、孔に紐をとおして吊り下げたと推定される。

親の気持ちをかたちにする

また北海道で出土した土版は、墓から出土しているので死者の副葬品である可能性が高い。しかし墓から人骨など、埋葬された人の年齢などを特定できる資料がなく、土版が墓に埋葬された本人のものかはわからない。また東北地方のものは、出土した場所もさまざま、明確な用途は明らかではない。幼児の歩き始めの祝い、祭りの道具、子の成長を願うための護符(お守り)などの説がある。なぜ、手と足なのか。それは成長が一目でわかりやすく、粘土に押しつけるだけで形をとることができたためと思われる。また手形より足形の出土数が多いことは、「足は歩く」という意味があったのかもしれない。

青森県三内丸山遺跡から多数の子どもの墓



上:手形付き土版
下:足形付き土版
ともに青森県大石平遺跡より出土(青森県立郷土館所蔵
撮影・小川忠博)

が見つかったように、縄文時代において乳幼児の生存率はとても低かったと考えられている。成長の証か、あるいは死亡した子の生きていた証かはわからないが、子を想い、案じる親たちの気持ちがかたちになったと考えられる。

青森県立郷土館の考古展示室には大石平遺跡から出土した手形・足形土製品がひっそりと展示されている。ときおり幼子連れられた母親が土版を見ているが、その表情に約三五〇〇年のときを越えて通じ合う親の気持ちが映し出されている。



大理の回族の男性が、モスクの礼拝堂入り口で脱いだ靴の中敷。
もっともよく好まれるモチーフのクロスステッチ

雲南省大理盆地の靴の中敷

横山廣子 民博 民族社会学研究所

中国では刺繍を施した靴の中敷を作る伝統が各地で見られる。雲南省大理盆地の場合、中国語で「挑花」とよばれる、細かいクロスステッチの刺繍をする。密集させたクロスステッチのコントラストで模様を浮き上がらせる。わたしもペー族女性に習って作ってみたが、たいそう時間と根気のいる仕事だった。

その後、何年もして、仲良しの女性が、仕上げた中敷を手に、「これは誰のだと思う」と聞いてきた。女たちが手仕事で一番、腕によりをかけてるのは、自分用のを作るときだと知っていたわたしは、そう答えようとした。が、中敷の大きさに躊躇した。彼女は「これは男用。自分のなんて、もったいなくて作れない」と言ってニヤリとした。突然、わたしは、隣りの回族の村で、モスクの入り口にずらりと並んだ男たちの靴のなかに、華やかな彩りの中敷を何枚も見つけたことを思い出した。「わたしを忘れないで」という文字が刺繍されているものもあった。それでも男性用の方が多く作られるとはまったく気づかなかった。

大理で脱いだ靴を見る機会は、回族の礼拝時以外、ほとんどなかった。その生活では、靴を脱ぐといえは寝台に上がるときぐらいで、中敷の模様など他人が目にすることは滅多にない。親密な間柄だけが知っている、針仕事に込められた愛情といふべきか。それは、中国の文化において、日々の生活を通して個々に刷り込まれた足にかかわる感覚が、日本より奥深く、官能的とさえ感じられることも無縁でないような気がする。



「わたしを忘れないで(勿忘我)」の文字の刺繍が、クロスステッチの上から施されている中敷

ハイヒールの起源には大きく二説ある。ひとつは、人口が集中するようになったヨーロッパの街路が汚泥にまみれていたので、靴にかぶせて履いたオーバースューズに由来するとする説。もうひとつは、中東の一〇センチを超える厚底の履きものが一六世紀ごろにヨーロッパに伝わったとの説である。



纏足靴
H 0232278
(国立民族学博物館所蔵)

「ルイヒール」
(日本はきもの博物館所蔵)

ハイヒールから透けて見えるもの おしゃれか健康か

山本 芳美 都留文科大学准教授

「しゃれ」というもの。木製やコルク製に代わって、人の体重を支えられるスチール芯が開発されるや、ヒールは細く高くそびえ立つようになった。さらに、尖ったつま先がよい、となると邪魔になるのは足幅を広げる小指だ。アメリカでは、小指を切りとる手術さえあった。

だから、苦痛を母とすれば、ハイヒールの双子のキョウダインは中国の纏足となる。纏足のレントゲン写真を見ると、土踏まずを圧縮させて人工ヒールを造りだしている。纏足もハイヒールも、立てば胸とお尻が突き出し、歩けば腰は揺れる。だから、男性に女性の性的魅力をアピールする行為と説明されてきた。

しかし、一般の女性たちがハイヒールを選ぶのは、男性の視線ではなく、健康を優先させた靴に満足できないからだ。ハイヒールを履けば、足の故障が起こりがちになる。でも、健康靴はやほつたい。おしゃれ心と健康、相反する要求を満足させる理想の靴を捜し求める女性の姿で、今日も靴売り場にはぎわっている。

カラーウー——出家修行者のゲタ

三尾稔 民博 研究戦略センター

今はかなりゆるやかだが、インドの特にヒンドゥー教徒のあいだでは、履きものを履けるかどうかは身分の上下を示す重要な区別だった。その規範が残る村落では、身分が低いカースト民が古くからの領主の館の前では裸足で歩く姿を今も見かける。また、寺院に入るときは老若男女、身分を問わず裸足になるという慣習は都市部でも幅広く守られている。酷暑の盛りには石畳を歩くと足裏がやけどしそうに熱くなるが、インドの人は皆平気顔だ。



僧院長の玉座とカラーウー。僧院長不在時のしつらえ(2011年8月、ラージャスターン州ウアイフル市ラーマナンディ教団の僧院)

写真のゲタは木製で重い。鼻緒がなく、突起部分を親指と第二指ではさんで歩く。ヒンディー語でカラーウーというが、外出用ではない。かつては屋内履きとして多くの男性が使っていたというが、今では限られた出家修行者の僧院の、しかも僧院長や幹部だけが使う。このゲタで歩くことは、屋内のケガレにも足を触れさせない意味がある。僧院長の外出時には彼の「玉座」にカラーウーが恭しく置かれ、身代わりとして尊崇の対象にもなる。

カラーウーは権威の象徴なのだ。それでも重くて不都合なゲタをつかかて歩くのは大儀そう。身分が高いとさせて歩かなくても済むのだから、威光を示す側も大変ではある。

日本の水虫に勝るものなし？

水虫は、足にできる徴である。水虫を知らない日本人はいない。もちろん世界にも水虫は存在する。しかし、その国民普及率と認知度、そして難治性において、日本の水虫に勝るものはないようである。現代日本では、男性の10人に2人、女性の3人に1人がかかり、「一度かかったら一生治らない」ともいわれる。これだけの需要から、製薬業界では、水虫完治薬を発明すればノーベル賞級といわれて久しく、皮膚科学会では、水虫研究は「花形」とさえよばれている。

なにより、日本の水虫の特徴は、万人が平等にかかりうることにある。野球少年からビジネスマンのみならず、ある大臣経験者によれば、選挙運動で水虫にならぬ者はおらず、日本の政治家で水虫でなければ、それは本物ではない、とのこと。現に衆議院の売店でも、水虫薬はよく売れる。最近では、女性向けに特化した販売戦略も各社強

化され、ピンク色の水虫市販薬もネット市場を中心に売り上げを伸ばしている。さらに、かつては五月の連休明けから梅雨ころが売上のピークであったが、今や季節性も失われ、冬も好調な売れゆき。もはや日本の水虫は、永田町もオヤジの域もこえ、老若男女、職業階層問わず、華麗なる蔓延をみせている。

通勤快足

一体なぜ日本人の足ばかりに徴が生えるのであろうか。なにしろ日本は、世界に名だたる清潔好きで知られてきた。幾度となく入ることをいとわぬ温泉やお風呂、いかなる飲食店にも配置されるおてふぎ、そして徹底した靴の脱ぎ履きなど、穢れなき日本のところは、誇り高き日本文化として、人びとの生活に浸透してきたはずである。

じつのところ、かくも水虫が日本の水虫となりえたのは、この清潔概念と恥意識にある。高度経済成長以降、湿潤な風土のもと、服装と住まいの西洋化が国民的普及したことで、水虫は国民病と化す。湿気が高いなかで長時間同じ靴と靴下を履くことは水虫の繁殖を促す。が、なかでも、日本の

水虫がかくも蔓延をさせた一因には、清潔志向ゆえに尊ばれた土足の拒否と床の共有がある。靴を脱いで大勢と共有する床は水虫の感染媒体となる。そのような床を共有する文化をもつ限り、人の水虫は人ごとではなくなる。つまり、日本社会において水虫は村八分の要因となりかねず、ゆえにそれは恥と結びつくのである。

そして、黄金の八〇年代をつくり上げたサラリーマンたちの長距離通勤と長時間労働によって、空前のヒットを記録したレナウンの水虫予防靴下「通勤快足」は生まれた。ジャパンパッシングがもつとも強かった一九八七年、世界が嘲弄した早朝の満員電車に、心細げに乗り込む新米社員に、「いいか、通勤快速（足）は恥ずかしいことじゃないんだぞ」といい聞かせる先輩社員を描いたCMは、そのすべてを象徴していた。

日本における水虫の国民的蔓延の背景には、日本人の精神構造を根本で支える清潔概念と恥意識と密接なかわりがあった。要するに、この清潔概念と恥意識という日本精神がある限り、たとえ日が沈もうと、また日が昇ろうと、日本の水虫は、永遠に日本の水虫であり続けているのである。

イギリスの水虫論

保明 綾 マンチエスター大学研究員

アスリートの足

イギリスに住むようになって久しいが、日本と同様、英国でもフットケアは美容の一部になっている。大手ドラッグストアの店内には、スキンケアと並んで足のケアの独立した部門が設けられ、臭い消しから足ダコ予防まで足に関する幾多の商品が棚を飾っている。さらに、一歩お店を出ると、足の矯正や治療を売りにした靴屋もある。

水虫も、日本と同様、足の美容・健康を脅かす症状として認知されている。しかし、だれもが悩まされる、いわば国民的問題として捉えられている日本の水虫とは違う。英語圏では、水虫を「アスリートの足」(athletes' foot)とよぶ。「虫」が無差別的に引き起す症状というよりは、スポーツ選手という集団が体験する「足」の病気として認識されてきた歴史をほのめかしている。

香港の足

わたしが専門とする医史学で水虫の語源を紐解いてみると、イギリスの医学界で白癬菌というカビが水虫の病原であると確認されたのは二〇世紀のはじめ、お披露目した人物はロンドンのキングスカレッジ病院の皮膚科医であったアーサー・ウィットフィールドである。ちなみに、当時イギリスでの水虫の呼び名は「アスリートの足」ではなく「Hong Kong foot」「香港足」であった(参考までに中国語では、現在でも「水虫を「香港脚」という)。こうした呼び名から、当時の大英帝国としての歴史が垣間見える。ウィットフィールド自身は、水虫を「香港足」とはよばなかったにせよ、患者が人生の大半を中国で過ごした事実を明記している。その後、帝国の医療を支える機関として一八九九年に設立されたロンドン大学衛生学熱帯医学大学院の学者によって更なる水虫の研究がなされるが、その際、水虫は香港のようなイギリス植民地内の熱帯に住む人や、熱帯を訪れた特定の人びとの症

状として描かれる。

しかし、第一次世界大戦後のアメリカにおいて、大学の運動部の学生に水虫が多発したことが報告される。その後、帝国の衰退、さらにアメリカ文化の繁栄とともに「香港足」の愛称はすたれ、イギリスの医学界でも水虫を「アスリートの足」とよぶようになる。

しかし、水虫が特定した集団に頻発する症状とする視点は、二〇世紀半ばになっても存在していた。戦時下のイギリスでは水虫に悩む兵隊の症例が紹介されているし、平時になると、今度は、炭坑労働者の水虫が職業病として注目されるようになる。一九五一年には、国立の機関である医学研究協議会が、炭坑労働者の水虫を調査すべく委員会を立ち上げたほどである。

イギリスの水虫論は、普段はとるにたらないとされている足の問題が、じつはイギリスの歴史において重要な出来事と直結していることを浮き彫りにしてくれる。



失われた共存の可能性を求めて

すがせあきこ
菅瀬 晶子
民博 民族社会研究部

90年代の不平等な和平プロセスの破綻を経て、解決の糸口すらみえないパレスチナ・イスラエル紛争。対立ばかりが、両者の歴史ではない。しかし暗澹たる現状の陰で、かつて存在した共存、そしてその後の両者の変化は、いまだ過去に置き忘れられたままになっている。

エルサレムは誰のもの
「エルサレムは我々のもの（アル・クドゥス・ラナー）」

アラビア語でそう大書されたステッカーをはじめて目にしたのは一九九七年初夏、イスラエルとパレスチナ自治政府の和平も行き詰まっていたころである。一九六七年以来、イスラエルの占領下にあるエルサレム旧市街のシンボルのひとつであり、ムスリムにとっては重要な聖地のひとつでもある「岩のドーム」をあしらったこのステッカーは、車のバンパー、商店の店先、ゴミ箱、とにかくあらゆる場所に貼られ、エルサレム所有権はパレスチナにあると訴えていた。

あのスローガンはフェイルーズの歌からとられたのだと、教えてくれたのはパレスチナ人の友人だった。フェイルーズは隣国レバノン出身のキリスト教徒で、今や伝説の域に達した、アラブ世界屈指の歌姫である。パレスチナ人の故郷への想いを代弁した代表曲のひとつ、「アツ・ザフラトゥ・ル・マダーイン（あらゆる街のなかの花の意）」のラスト近くでは、「この家は我々のもの、エルサレムは我々のもの」という一節が、確かに聞きとれる。

「あれはいい曲よね、とつても」
友人はそういって、ステッカーについての評を締めくくった。あえてフェイルーズ

の曲のみを賛美したのは、彼女がステッカーに不満をおぼえていたせいだろう。フェイルーズ同様、キリスト教徒である彼女にとって、エルサレムの象徴は岩のドームではなく、イエスが復活を遂げた「聖墳墓教会」にほかならない。パレスチナ人口の二割を占めるキリスト教徒のため、このステッカーには聖墳墓教会も描かれるべきだという主張を、わたしはのちにほかのキリスト教徒の友人たちから聞くことになる。

そしてわたしもまた、似たような危惧を、このステッカーに対して抱いていた。このステッカーの「我々」はいうまでもなくパ

レスチナ人、しかもおそらくムスリムのみである。ステッカーに聖墳墓教会はもちろん、ユダヤの聖地「嘆きの壁」も加え、イスラエルが建国される前に、エルサレムをこの地に生きるすべての一神教徒で共有しようという者はいないのか。以来このステッカーを目にするたびに、ナシヨナリズムの厳然たる排他性を突きつけられ、暗然としてしまうのだ。

ふたつのナシヨナリズムの接点をさぐる

それまで漠然とパレスチナとよばれ、アラブ人たちが暮らしていた東地中海沿岸西部に、シオニズムを掲げるヨーロッパ・

ユダヤ人が入植をはじめたのは、一九世紀末のことである。その後、第一次世界大戦後の英国による委任統治時代を経て、彼らは一九四八年にユダヤ国家イスラエルを建国することになるが、その結果一〇〇万以上ともいわれるアラブ人（パレスチナ人）が家や土地を失い、難民化することとなった。これをパレスチナ人たちは、「ナクバ（大災厄の意）」とよぶ。

一般的には、この四八年のナクバが、パレスチナ・イスラエル紛争の発端とされている。しかしながら、当時すでにユダヤ人の入植がはじまって半世紀が経過していた。紛争は突如降ってわいたのではなく、半世紀のあいだに入植者とアラブ人との接触があり、摩擦へと発展していったというのが真相だ。一九二〇年代に入ると、アラブ人たちは入植に危機感を抱くようになり、周辺地域で起こっていたアラブ・ナシヨナリズムの影響を受けて、パレスチナ人アイデンティティを醸成しはじめる。つまり彼らは、ユダヤ人入植者の存在を認識することによって、パレスチナ人となったのだ。

もっとも、入植者とパレスチナ人のアラブ人との接触が、不幸なものばかりであったとは、必ずしもいえない。一部の地域では、両者が四〇年代まで平和に共存していたという証言も残っている。さまざまな宗教・教派が雑多に入り混じるパレスチナでは、



イスラエル側からヨルダン川西岸地区を隔てる「分離壁」。イスラエル側は「安全保障フェンス」、パレスチナ側や人権活動団体は「アパルトヘイトウォール」とよぶ

古来異なるバックグラウンドをもつ者たちが隣人として助け合い、宗教行事を共有するのは当然のことであった。つまり、聖地エルサレムの一方的な所有権を訴えるようなステッカーが生まれる下地は、本来存在しなかったのだ。

シオニズムもパレスチナ・ナシヨナリズムも、当初は自分たちの国がほしいという、まっとうな希求から生まれたものである。しかしながら、アラブ人との接触や外部からの影響を経て、シオニズムは排他的な性格を帯びるようになり、その姿勢は今日の占領政策の根幹をなす。それに自爆という「殉教行為」で対抗しようとする一部のパレスチナ解放運動もまた、シオニズムの合わせ鏡のような存在といえよう。共同研究「パレスチナ・ナシヨナリズムとシオニズムの交差点」は、これまでほとんど研究されてこなかったこれらふたつのナシヨナリズムの接点を、さまざまな視点から探ることをめざしている。9・11から一〇年を経て、さらに硬化しつつあるこの紛争のゆくえを見定めるためにも、必要な作業であらう。



エルサレム旧市街の「岩のドーム」。ムハンマドがここから昇天したといわれる、ムスリムにとって重要な聖地

共同研究
「パレスチナ・ナシヨナリズムとシオニズムの交差点」
2011年10月〜2014年3月
代表者：菅瀬 晶子

特別展

「千島・樺太・北海道アイヌのくらし」
ドイツコレクションを中心に

今年は日独交流一五〇周年に当たり、本特別展ではドイツのライプツィヒとドレスデンの民族学博物館の収蔵資料を中心に、本館の資料もまじえて、各館秘蔵のアイヌコレクションを紹介いたします。いずれも一〇〇年以上前に収集された名品ばかりです。北方の美の世界をご堪能ください。



魚皮製衣服(樺太)ドレスデン民族学博物館所蔵

会期 12月6日(火)まで
会場 特別展示館

■関連イベント
◆国際シンポジウム
「アイヌ文化研究の可能性を求めて」
古い資料を活かすつ、これからの研究や文化継承をどのように進めるか、新たな視点での研究やアイヌ民族との共同研究などを例に、若手研究者が発表と討論を行います。
日時 11月12日(土) 10時30分～17時25分
11月13日(日) 10時～16時
会場 第4セミナー室(定員80名)
※参加無料、要申込(先着順)
参加申込方法
Eメール・FAX・往復はがきにて左記内容を記入の上、左記宛先までお申し込みください。
【記入事項】
①参加者の人数
②参加者の氏名(ふりがな)
③電話番号(代表者) ※当日の連絡可能な番号
④FAX番号(FAXでのお申し込みの場合)
⑤往復はがきでお申し込みの場合は返信用の宛先
【宛先】
〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1
国立民族学博物館「2011年秋季特別展事務局」宛
E-mail: tokuevent@idc.minpaku.ac.jp
FAX: 06-6878-7506

◆「Anu Past and Present」
「ハンノのフィルムから見えてくるもの」
日時 12月4日(日) 13時30分～15時45分
(開場13時)
会場 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布
お問い合わせ先
広報企画室 企画連携係
電話 06-6878-8210
◆ギャラリートーク
11月5日(土)、11月23日(水・祝)、
11月26日(土)、12月3日(土)

みんぱくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第402回 11月19日(土)
「特別展開連」
絵画にあらわれたアイヌの風俗
講師 佐々木利和(北海道大学教授)



間宮林蔵「北蝦夷図説」
函館市中央図書館所蔵

描かれたアイヌの世界にはいつてみましよう。19世紀半ば以前、かれらは「蝦夷」と呼ばれていました。その姿が描かれた最古の例は延久元年(1069)です。さてその画例からどのようなアイヌ像が得られるのでしょうか。

第403回 12月17日(土)
中東のキリスト教徒——したたかなマイノリティ
講師 菅瀬晶子(国立民族学博物館助教)



イスラム教徒が人口の90%以上を占める中東で、圧倒的少数派ながら、「イエスが生まれ育った土地」に生きる者としての誇りを持つキリスト教徒たちが、あまり知られていない彼らの日常生活やイスラム教徒との関係、歴史のなかでの役割を、パレスチナやレバノンなど、東地中海地域の事例をもとにご紹介します。

国立民族学博物館友の会 電話06-6877-8893(平日9時～17時) FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第402回 12月3日(土) 14時～15時
「ビデオトークより」
ペー族の映像民族誌
——伝えたいことをどう伝えるかの葛藤——
講師 横山廣子(国立民族学博物館 准教授)
映像では、モノでは表現することのできない人びとの生活の雰囲気を描き出し、祭りや儀礼などを一連の流れのなかで伝えることができます。制作中のペー族のマルチメティア番組「雲南省のペー族の暮らしと文化」の映像をもちいて、彼らの生活を紹介しながら、映像として表現するうえでの悩みや工夫についてもお話します。

第403回 1月7日(土) 14時～15時
「フィールドワークの醍醐味を語る」
アマゾン川上流のキリスト教文化
——ボリビア、モホス平原の自然と歴史——
講師 齋藤晃(国立民族学博物館 准教授)
アマゾン川流域の南西の端、アンデス山脈との狭間には、日本の総面積の約半分に対応する広大な平原が広がっています。高温多湿の厳しい自然環境における人びとの暮らし、そして西欧との接触以降の複雑な歴史を、わたしの個人的体験を交えてご紹介いたします。

第404回 2月4日(土) 14時～15時
「フィールドワークの醍醐味を語る」
マヤから世界へ
——私のフィールドワーク体験——
講師 鈴木紀(国立民族学博物館 准教授)

《今後の催しのお知らせ》
「体験セミナー」
「日本酒つくりの今と昔(仮)」
2012年2月下旬～3月
「研修の旅」
「バルカン半島西部を訪ねる(仮)」
2012年5月頃(10日程度)

◆みんぱくセミナー
左のページをご覧ください。
◆みんぱくウィークエンド・サロン
特別展及び企画展開催中は、おもに特別展、企画展開連のお話をお届けします。詳細は24ページをご覧ください。
カムイノミ(神への祈り)
みんぱくに収蔵されている標本資料への感謝と安全を願い、カムイノミをおこないます。
日時 11月25日(金) 10時30分
会場 玄関前広場
(雨天の場合は、屋内への変更あり)

企画展

「インド ポピュラー・アートの世界」
近代西欧との出会いと展開

インドの庶民の間で親しまれてきた風景画や宗教画、広告など約140点のコレクションを展示し、インドの人々の美意識や宗教観の変遷をたどります。
会期 11月29日(火)まで
会場 本館展示場内

刊行物紹介

■中牧弘允 著 何芳訳 王向華 監訳
『日本会社文化——昔日の名、今日の会社』
北京大学出版社



『むかし大名、いま会社——企業と宗教』(淡交社、1992年)の全訳。中国語訳に際し、監訳者の序文と著者の中国版自序がついている。香港大学現代語言及文化学院の企画した東亜文明双書のシリーズで最初の刊行物。原著を端緒とし、民博が現代企業の人類学的研究の拠点となっていること、また日本企業が文化的伝統を継承していることなどが序文で紹介されている。

■三尾 稔・福内千絵 編
『インド ポピュラー・アートの世界——近代西欧との出会いと展開』
千里文化財団 定価:1,575円



企画展「インド ポピュラー・アートの世界——近代西欧との出会いと展開」の関連解説書。図版も多数使って、19世紀半ば以降のインドのポピュラー・アートの成立や発展、現在の姿についてわかりやすい解説を加えた。

●展示場新構築のお知らせ
ヨーロッパ展示とインフォメーション・ゾーンが来年3月に新しく生まれ変わります。それに伴い近日中にヨーロッパ展示が、展示場新構築工事のため閉鎖される予定です。今のヨーロッパ展示の見納めですので、ぜひ展示場に足をお運びください。
●無料観覧日のお知らせ
11月3日(木・祝)は文化の日、19日(土)、20日(日)は関西文化の日のため、本館展示・特別展を無料で観覧いただけます。ただし、11月3日は、自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。
東日本大震災被災地に対する本館の取り組みについてはホームページをご覧ください。
●毎日新聞夕刊連載「旅・いろいろ地球人」
みんぱくの研究者のエッセイが毎週木曜日に掲載されています。
*電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土・日・祝を除く)です。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ
電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

企画展「インド ポピュラー・アートの世界」関連商品

現在、開催されている企画展「インド ポピュラー・アートの世界——近代西欧との出会いと展開」(会期11月29日(火)まで)にあわせて、ショップでは、インドのさまざまな神々が描かれたポーチやバッグをとりそろえています。
ぜひ、お気に入りの神様を見つけてください。ガネーシャのお守りや壁飾りなど、たくさん関連商品がみなさんの来店をお待ちしております。



神様ポシェット 525円
神様バッグ 1,575円
神様エコバック(ジュート) 1,260円(すべて税込み)

西洋の巨匠で飾られた南米の美の殿堂 チリ国立美術館

ふじかわ さとし
藤川 哲 山口大学准教授

国際美術展「トリエンナル・デ・チリ 2009」入り口



南米でもっとも古い国立美術館

チリの首都サンティアゴまでは、飛行機で約二七時間。成田を夕方七時に発って、翌朝一〇時ごろアルトゥロ・メリノ・ベニテス国際空港に到着した。

チリ国立美術館は、一八八〇年に設立された南米でもっとも古い国立美術館である。旧市街中心部にあり「サンタ・ルシアの丘」の北側に位置し、所蔵品は約三〇〇〇〇点にのぼる。チリ建国一〇〇年を記念して一九一〇年に建てられた同館の建物は、フランスに学んだチリの建築家エミル・ヘキエによる新古典主義様式で中央に吹き抜けのホールをもち、鉄とガラスでできたドーム状の天井採光部が印象的だ。

トリエンナル・デ・チリ二〇〇九

筆者が同館を訪ねたのは二〇〇九年一月のことである。二〇一〇年の建国二〇〇年記念に向けた先行事業として、今後三年毎に開催していく国際美術展「トリエンナル・デ・チリ二〇〇九」の第一回展の会場場になっていたのである。

同展は、サンティアゴのみならず、

イキケ、バルパライソ、コンセプシオンなど南北に長い同国の七都市の文化施設で一斉に開催される国家的規模の事業だった。

チリ国立美術館では、トリエンナルの企画展「国家の領土——一九世紀チリの風景画と地図製作」のほかに、米国で活躍したゴードン・マッターハクラーク（チリを代表する画家ロベルト・マッタの息子）の回顧展や、地元サンティアゴで活躍するファン・パブロ・ラングロイスの一九六九年の作品《柔らかな物体》の再現展示などがおこなわれていた。「国家の領土」展は、一九一〇年までに描かれた風景画、水彩スケッチ、地図、地理



ファン・パブロ・ラングロイス《柔らかな物体》

学書を展示し、「国土のイメージ」の形成史を振り返る内容だった。現代美術家のアリシア・ビラリールによる、小学生用の机を並べたインスタレーションも展示されていた。

金地モザイクの美術家たち

同館の正面には、金地モザイクによって六名の美術家の肖像が再現されている。ラファエロ、レオナルド、ブラクシテレス、フィディアス、レンブラント、ジャン・ゲージョンである。同じ南米でも一九六九年完成のサンパウロ美術館は、展示室を中空に浮かせるモダンなデザインで、こうした装飾をもたない。他方、南半球では、シドニーのニュー・サウス・ウェールズ州立美術館の外壁に、ドナテッロやルーベンスらの名前とともに、「ブラクシテレスの前でポーズをするフリユネ」などの浮彫りが埋め込まれている。同館の建物は一八九七年の完成。その後の一〇〇年で西洋美術史に対する理解は深まり、権威も相対化されて、こうした装飾に対しても適切な距離がとれるようになったといえるのではないだろうか。

みんぱく 私の逸品 マツタロクカムイ（奥に座す神）

標本番号 H0033419
地域 北海道阿寒郡鶴居村字下雪裡
収集年 1978年

北海道大学アイヌ先住民研究センター准教授

北原 次郎太

みんぱくのアイヌの文化展示のコーナーを訪れると、壁面の高い場所にこんもりとした黒いかたまりがかけられている。これは釧路の鶴居村字下雪裡に暮らした八重九郎という男性が自宅に祭っていたイナウである。

イナウは、神事の際に神に捧げられる。イナウの上部には木をリボンのように薄く削り出した「キケ」がつけられる。祭壇に並んだイナウからキケが幾重にも垂れ下がり、あるいは紐状に寄り合わされた房となって風に揺れる姿は神々しく、神々がもつとも好む奉納物だというのもうなずける。

イナウには奉納物としてだけでなくメッセンジャーとしての性質もある。イナウの素材となる樹木には、一本一本に木の神が宿っている。イナウを祭壇に立てて祈ると、イナウの内にとどまっていた木の神が抜け出して神々のもとへ赴き、人間の祈りをつたえてくれるという。つまり木の神が人間の使者の働きをするのである。生物・無生物を問わず地上のあらゆる物に精霊が宿り、敬虔な態度で接すれば精霊たちは人間に助力をするものだというアイヌ民族の世界観がここにもあらわれている。

こうした奉納物のイナウは一回性のもので、神事のたびに新しく作られる。神事が終わった後のイナウは、魂が飛び去った抜け殻であり、土にかえて行くのに任せておいた。イナウは神事の直前に作られるから、木の神が人間の許に滞在するのは神事のあいだのほんの一時である。これに対し、本資料は守護神として屋内で恒常的に祭られるイナウである。製作の際にも、人間の傍で未永く加護してくれるように言い聞かせ、出来あがってから上座に安置して事あるごとに祭る。このようなイナウとしては日高地方や胆振地方といった北海道の西部で祭る「チセロカムイ（家の守護神）」が知られてきたが、八重氏の祭った守護神は西部のものとは形状が大きくことなる。八重氏はこれを「マツタロクカムイ（奥に座す神）」とよんでいた。年中行事の度に、新しいキケを挿して祭るので、時間が経つほど煤けた大きなイナウになっていく。マツタロクカムイの黒ずんだ巨躯は、アイヌの信仰文化がもつ多様性と、それが受け継がれてきた年月の長さを教えてくれる。



横から見ると、黒ずんだ古いキケの上に新しいキケを挿していることがわかる。

南シナ海の東と西

二〇一〇年九月、ベトナム少数民族の文化を研究しているわたしは、フィリピン共和国のアルバイ州を訪問する機会をえた。ベトナムとフィリピン群島のあいだには、南シナ海が横たわっているとはいえ、紀元前から文化交流があったことが考古学的にも知られている。ベトナムとの比較を念頭に置きながら、フィリピン農村を訪ねた。

ベトナム米輸入量第一位の国

最初に訪ねたのはサン・ミゲル島である。この小島は台風発生場所が近いので、しばしば被害を蒙る。そのため海岸に沿って防砂林が続き、その背後の道路沿いに集落ができ、ニッパ椰子やトタン屋根の簡素な家屋と家庭菜園が並んでいる。キャッサバ、じゃがいも、トウモロコシ、ココナツなどの作物も作るが、漁業が主産業であり、ベトナムの沿岸部と同様に、小魚から塩辛も作られる。この島には田が極端に少ない。

あまり知られていないかもしれないが、じつはフィリピンはベトナム米の輸入量第一位の国である。一人当たりの稲の作付面積は、他の東南アジア各国より少なく、米が不足している。台風の影響もあるので生産性が上がらないのである。だから、輸入で米不足を補ってきた。たとえば日本が、風雨対策のために、稲の品種改良を重ねて乗り越えてきたのとは対照的だ。

フィリピンと緯度が近いベトナムも、台風による洪水被害が有名である。そのため政府は、新品種導入や、大規模灌漑事業など、農業政策に力を注いできた。その甲斐あって米の輸出量は、今や世界第二位である。ただ、近年は自国経済の安定化のため、価格変動の影響を受けやすい米のような一次産品への依存を良とせず、工業化を急いでいる。

棚田ブランドのイフガオ米

米については、マニラ市内にあるサンアンドレ・マーケットを訪ねた際にも、思うところがあつた。市場にはベトナムでもおなじみのマンゴー、ドラアンなどの熱帯フルーツが並んでいる。しかし、わたしがこの市場で興味を引かれたのは米であつた。

各種高級米がキロ単位で売られていた。香米四五（フィリピンペソ、以下同様）、もち米六五、オーガニック四八、ジャスミン五五などであつた。

オーガニック米の産地はイフガオ州である。イフガオでは、ユネスコ世界遺産に指定された棚田保全のために、伝統的農法での米栽培がおこなわれていると聞く。一般的な米はキロ当たり三〇ペソ前後だから、ブランド商品化に成功したのだろう。このイフガオ米はその一・五倍の価格である。

いっぽう、農業人口が八割に近い農業国ベトナムの市場でも各種の米が売られているが、わたしの知る限り、国内特定産地のブランド米、タイや台湾などから来た外来種の米が高級米として市場に出るものの、オーガニック米が市場で売られるという例は思い当たらない。オーガニック米は特別注文でやっと手に入るようである。ベトナムでは米の流通経路の不透明さや品質の保持に問題があるため、市場には出にくいものかもしれない。

産業から芸術へ

では、地場産業的な手工業品の流通についてはどうだろうか。ティウイ市では素焼きの陶器の産地も訪ねた。車同士だとすれ違うのも困難なくらい細い道を登ると、左右に小さな製造所兼土産物屋が並んでいる。伝統的に鍋や壺などの生活用品を作ってきたそうだ。ある工場を見学させてもらったが、混合・粉碎機や電動ろくろ、巨大な焼成窯など、量産体制が整っている。色彩も豊かになり、花瓶、草履や靴の形をした置物、携帯ストラップのような土産物など商品構成を多様化して販路を拡大し、産業を維持しているとのことであつた。

ベトナムの伝統手工業も、あらたな企業展開を開始している。ビントゥアン、ニントゥアン両省では、海上交易でも栄えたチャムによる王国の時代（二〇一七世紀末）に、高度な灌漑技術に基づく稲作と、各種手工業が盛んだつた。今でも水甕や壺など生活用品が野焼きで作られる。近年、地方自治体レベルのプロジェクトで新デザインの開発が進み、焼き物の芸術家の活動も目立っている。多民族国家を標榜し、民族や地域ごとの文化の保護と育成を国が支援してきたせいか、ベトナムでは、少数民族文化の観光業や芸術との結びつきが、フィリピンよりも顕著にあらわれている。このように南シナ海の東と西を比較してみると、やはり、地域や民族の文化の振興には、国家や地域の政策的支援が不可欠なものに思われた。

ティウイ市にある陶器工場
の土産物屋



サンアンドレ・マーケットでの
米の販売



サン・ミゲル島家屋



電動ろくろ



サン・ミゲル島
への到着



本多 守

東洋大学アジア文化研究所客員研究員

大阪平野の中部、大阪市の東南部に隣接する八尾市は、約二十七万の人口のうち六七〇〇人が外国籍住民である。これは市人口の二・五パーセントで、全国の平均値一・七パーセントを上まわっており、外国人市民の集住度も比較的高い。

その八尾市で一九七四年、トッカビは日本で生まれ育った在日コリアンの子どもたちが、差別に負けず、自分の豊かなルーツを肯定的に受けとめながら生きられる社会をめざして活動を開始した。それまで外国籍の九〇パーセント以上は韓国・朝鮮籍者であったが、一九九〇年代に入ると多民族化が進行し、国籍別に見ると、中国約一五〇〇人、ベトナム約八五〇人が占めるまでになった。それとともに、トッカビの活動もさまざまな外国人市民を対象とする方向へ広がってきている。

とりわけ、八尾市には大阪府内で一番ベトナム人が多いという特徴がある。一九七五年のベトナム戦争終結以後、難民としてわたって来た人たちが、定住促進センターで過ごした後、市内三カ所にある「雇用促進住宅」とその周辺に居住し始め、徐々にコミュニティとしての広がりを見せるようになってきた。そしてトッカビには、日本語に不自由なベトナム人から相談が多く寄せられるようになった。二〇〇四年、ベトナム語で対応できるスタッフを置いてからは、「病院へついて来てほしい」「保育所に子どもを入れたい」「市役所から届いた郵便が」何か教えてほしい」等々、相談件数は急激に増えていくことになった。

ム人会」というベトナム人コミュニティ組織（一九九八年設立）があり、三年前から中秋節を九月に開催している。そこで二人が中心となって、ベトナムの民話をベトナム語で披露したのだ。しっかりと話すベトナム語に驚いたベトナム人保護者が、自分の子どもも通わせ始め、今ではベトナム語教室の生徒獲得に一役買ってこれている。

今二人は、ベトナム語の紙芝居作りにとりかかっている。ベトナムルーツの子どもの多い小学校や保育所などで、ベトナム語にふれてもらうために読み聞かせをしてみたいという。二人は、ベトナム語など語学力を身につけ、将来は国をこえて活躍することを夢見ている。

自分のルーツを語る社会

そんな二人だが、出自に関して悩みがなかったわけではない。ティさんは、中学校入学時から日本名を用い、まわりには自分を日本人だと言っていたという。「ベトナム人だからいじめられたらどうしよう」という不安があったからである。事実ホアさんは学校で「お前は、ベトナム人」と言われたことがある。今では周囲の理解もあったことでその不安もなくなりベトナム人であることを隠さない。

しかし、このような経験や思いを抱くのは二人に限ったことではない。ベトナム名をもじられたり、ベトナムへ帰れと言われたりして、ベトナム人であることを嫌だと感じている子は少なくない。そこで日本名を名乗り、ベトナム人であることがわからないようにふるまう。これは、これまで在日コリアンの子どもたちがたどった歴史とまったく同じだ。

多文化を
ささえる
人びと

当たり前に語れる社会を作りたい ベトナムルーツの子どもたちとのかかわりから

大阪府八尾市で在日コリアンを支えるために活動を始めた特定非営利活動法人トッカビ。

その名は朝鮮の民衆のなかで親しまれ、育まれてきた空想動物「トッカビ」に由来する。

地域の多民族化に伴い、さまざまな相談を受けるようになったが、彼らの悩みには国籍にかかわらず共通点が見られる。

在日コリアンへの支援から学んだ経験がここでは引き継がれている。

パク ヤンヘン
朴 洋幸

特定非営利活動法人トッカビ代表

ベトナム語教室の開講——保護者の願い
こうしたなか、あるときベトナム語を忘れていく子どもとの意思の疎通に悩む親から、子どもにベトナム語を教えてもらえるところがないだろうかと相談をもちかけられた。ベトナム語が第一言語である親のもとに生まれた子どもたちでも、日本語社会のなかで次第に日本語が主流になる。幼少時たとえベトナム語能力があった子どもも、年齢が進むにつれ、ベトナム語を忘れてしまうといったことも少なくない。そこでトッカビでは保護者の要望に応えるために、二〇〇四年度から毎週土曜日ベトナム人教師をむかえベトナム語教室を開講した。これは現在も続いているが、その様子ですこしのぞいてみよう。

開講当初、六歳だったホアさん（現在中学一年生）は、「ずっと日本にいたらベトナム語を忘れるから」という母親の心配が動機となって参加するようになった。ホアさん同様、開講当初から通うティさん（現在中学三年生）は、「教室が」ベトナム人を受け入れてくれてるんだなあと思う」と話す。教室に通うようになってから家族での会話が増え、「こんなことばを知っているのか」と驚かれたり、自分がわからないことを両親が話していると「それってどんな意味？」と尋ねるようにもなったという。ベトナム語教室が、単に言語能力を高めることだけでなく、同じベトナム人の「居場所」をめざしてきたことが現在につながっているのかもしれない。

ベトナム語教室の活力は今、ホアさんとティさんに負うところが大きい。八尾には「八尾ベトナム人」は、今まで、コリアンの子どもたちが同じ立場で集う場を通じて、コリアンであることへの自信と肯定感を育ませてきたが、同時にコリアンであることを理由に、進路や就労から排除しようとする社会へも働きかけてきた。このような運動はベトナムの子どもたちにも必要なことだと感じている。「日本国籍になっても、自分のルーツがベトナムにあることは言っていきたい」とティさんが言うように、子どもたちが外国にルーツをもつことを隠さず、当たり前で語れる社会の実現を願わずにはられない。



紙芝居作りの様子。アイデアを出し合うティさん、ホアさん

日本語café。比較的、日本語理解が進んでいる人たちを対象として、お茶を楽しみながらゲームやお話をして日本語を学ぶ。毎月1回開催（2011年7月15日）



八尾国際交流野遊祭。出会い・交流・共生をキャッチフレーズに、毎年10月に開催。コミュニティのベトナムや中国等の外国人が舞台や出店で活躍している（2010年10月30日）

ベトナム語教室に通う仲間の関係性を深めるための交流会（2008年7月26日）



ニジェール河を 泳いで渡る牛

西アフリカの人びとに多大な恵みを与えてきたニジェール河。その流域では、季節が雨期と乾期に二分され、人も動物も自然の変化に応じて移動を繰り返す。雨期あけの豊富な水をたたえた河を渡る牛の大移動は、命の危険をともないながらも、牧夫たちにとっては喜びに満ちた半年ぶりの再会の機会である。

暮らしに豊穣をもたらす水

西アフリカの広大なサバンナを、西から東へとつらぬいて流れるニジェール河。全長四〇〇〇キロメートルを超え、日本列島より長い河川でありながら、源流から河口までの高低差は一〇〇〇メートルにも満たない。そのため河の水はゆっくりと流れ、雨期になるといたるところで河川域からはみ出して、広大な氾濫域を形成する。ニジェール河が西アフリカの人びとに大きな恵みを与えてきたのはそのためだ。

そうした氾濫域のなかでも最大の規模をもつのが、マリ共和国の中央に位置する「ニジェール河内陸三角州」とよばれる低地だ。南北一五〇キロメートル、東西一〇〇キロメートルと、九州ほどの広がりをもつこの地域は、近年、上流にダムがいくつも建設されたことで氾濫域の面積は減少した。それでも九月から一月にかけて氾濫水でおおわれるこの土地は、西アフリカ固有のグラベリマ稻の原産地であるとされるなど、農業や漁業、牧畜に適した環境を提供することで古くから人びとの暮らし

を支えてきたのだ。

命をつなぐ大移動

一月になり、水が引き始めると、氾濫域の各地で生命の営みが活発になる。自然氾濫を利用した水田では、農民たちが胸まで水につかりながら早生の稲の収穫を開始する。水にのって氾濫域に散って成長と繁殖を実現していた魚も、減水とともに狭い河川域に戻ろうとするので、漁師にとっても絶好の季節である。そして、六月から九月半ばまで続く雨期のあいだ、

北方の乾燥地帯に散って、雨もたらした草を食べていた牛も氾濫域に戻ってくる。氾濫後の湿り気を帯びた土地が大量の草を生育させるので、それを食べることで九月月続く乾燥期をのり切るのだ。とはいっても、雨期の終わったばかりのニジェール河とその支流はまだたくさん水をたたえている。そのため、氾濫域に到達するには、牛も人もニジェール河やその支流を泳いで渡らなくてはならない。この時期、川幅は広く、しかも水流は早いので、泳ぎ渡るのはいへんだ。生まれればかりの



何十万頭という牛が牛飼いに追われながら、いっせいにニジェール河を泳いで渡る光景は壮大な眺めだ

子牛は船に乗せられ、他は牛飼いに追われながら、流れのなかに入るのだ。

大きな危険をともなう行為なので、渡河のおこなわれる場所は内陸三角州のかぎられた場所であり、その日にちも、水量の減った一月末か二月初めの土曜日とさだめられている。土曜日は地域の慣習で吉日であり、年によって水かさの増減があるので、日程があらかじめ決まっているわけではない。渡河の儀式とそれに関わるさまざまな行事はヤラルとよばれており、内陸三角州のうちでもっとも盛大なのは、南西の端に位置するジャファラベと北西のジャルツベである。マリには総人口一四〇〇万に近い数の牛が飼育されているとされるので、それらの地点には何十万という牛が集まってくる。それがいっせいに河を渡るのだから、まことに壮観な眺めである。

一年をしめくくる行事

西アフリカのこの地方で、牛を飼うのはフルベという集団だ。彼らのうち、牛を追って半年近く原野を駆けめぐるのは独身の男たち。一方、妻子もちや高齢者、女性や子どもは村に残って、生活を送っている。したがって、彼らが一堂

に会するのは半年ぶり。しかも、多くの村々の牧夫が集まってくるので、渡河のおこなわれる村は一気に祝祭の雰囲気になる。

前夜から太鼓の音が鳴り響き、女性たちはめかしこんで親戚や友人宅を訪問し、河のほとりでは一弦のリユートがかき鳴らされる。敬虔なムスリムの多いフルベの人びとは認めようとしないが、水に親しい漁民たちは渡河の無事を祈って水の精霊に祈願しているのだという。フルベの家々ではごちそうがふるまわれ、旧家や金持ちの家には語り部が出向いて、家族の系譜やフルベの伝説的な英雄の物語が語られる。さらに、この日はばかりは無礼講が許される。半年を原野で暮らした男たちを歓待するために、既婚の女性たちが彼らを迎え入れるのだ。

フルベの人たちの生業と社会生活のピークをなすこの行事は、二〇〇五年にユネスコの世界無形遺産に登録された。マリの登録第一号であるそのため、今日では大臣や政府のお偉方がセレモニーに列席するほか、外国からも大勢の観光客がやってくる。マリの住民の大半はムスリムなので、クリスマスを祝うことはしない。この渡河がおこなわれると、各村では一年の終わりが近いことに気づくのだ。

失われた村を想い続ける六六年

井口 淳子
大阪音楽大学教授

嘉手納町のある式典

嘉手納町と聞くと、誰もが「嘉手納基地」を思い起こすだろう。しかしあの広大な基地、灰色の巨大な滑走路の下に、かつて多くの集落が存在し、大綱引きやエイサー（旧盆に踊られる舞踊）などゆたかな民俗文化がはぐまされてきたことを想像できる本土の人は少ないのではないだろうか。嘉手納米軍基地の町となったのは、一九四五年四月一日、嘉手納の目前に米軍艦隊一三〇〇船があらわれ、艦砲射撃が一斉におこなわれたその日からである。

そして六六年が過ぎ、今年二〇一一年六月一九日、嘉手納町中央公民館で、ある記念式典が開かれた。「千原郷友会創立五〇周年式典・祝賀会」である。「郷友会」とは、文字どおり、故郷を同じくする人びとの親睦会であるが、千原村は、嘉手納基地のなかに消失し、戦後一度たりと村民は村落の土を踏むことがかなわなくなった「失われた村」なのだ。

千原のように基地に消えた村の郷友会は他にもいくつか存在するが、郷友会活動がここまで活発なところは少ないであろう。会費を集



50周年祝賀会でのエイサー

め、年に一、二度、集まるだけなら、新しい住まいのコミュニティへの帰属意識の方が強くなるのは自然ななりゆきである。

決して村を忘れない

さて、冒頭の式典・祝賀会は三時間におよぶ熱気のコモった会であった。伝統舞踊や武術、ウチナーグチ（沖縄方言）でのスピーチの最後をかざったのは、やはりエイサーであった。感きわまった長老までもが舞台にあらがり踊りはじめたときには会場の熱気は最高潮に達し、わたしのそばにいた一人の婦人が「他村に嫁ぎましたが自分のふるさとが誇らしいです」とささやいた。

すぐそこにある故郷、しかし滑走路の下に沈んだ村の姿は一枚の航空写真に残されている。米軍が上陸直前に撮影したその写真は祝賀会のプログラムの裏表紙に使われていた。整然と耕された畑地が見てとれる。そこには

千原村とエイサー
では、なぜ、千原の場合、郷友会が五〇年も続き、県内に散居する三〇〇世帯から二〇〇名もの旧村民とその子孫が集まる盛大な式典・祝賀会が開かれたのだろうか。じつは「千原村」は消失したものの、「千原」の名は今日なお全県にとどろいているのだ。沖縄の旧盆には「エイサー」という舞踊が先祖供養のために踊られる。もともと沖縄中部地域はエイサーがさかんであるが、千原のエイサーには、突出した特徴がある。男性のみで編成され、武術の型をとり入れた独特の舞踊様式をもち、しかも、変化することをいとわぬ現代沖縄のエイサーに対して、かたくななまでに伝統にこだわり、先人の踊りの型を守ることが旨としていのである。千原は「屋取（ヤードゥイ）集落」とよばれる土族が地方の農村に移り住み形成した村であり、そのこともエイサーの様式や伝承意識に影響を与えていると考えられる。

写真にあるように、腰を深くおとし、踊り続けることは厳しい練習を必要とする。戦前は、村を決して忘れまいという強い意志と村民としての自負が込められている。

「東日本大震災」以降、福島原発避難地域の人びとが置かれている状況に深い共感を示し、いつになれば故郷に帰れるのかと、わがことのように悲嘆の感情を抱いている人は多いであろう。しかし、福島の状況は筆者に、嘉手納をはじめとする沖縄の米軍基地にもともと数多くの村落があり、今なお強い郷土愛をもち続けながら六六年間、帰村がかなわなかった人びとがいることを思い起こさせてならないのだ。

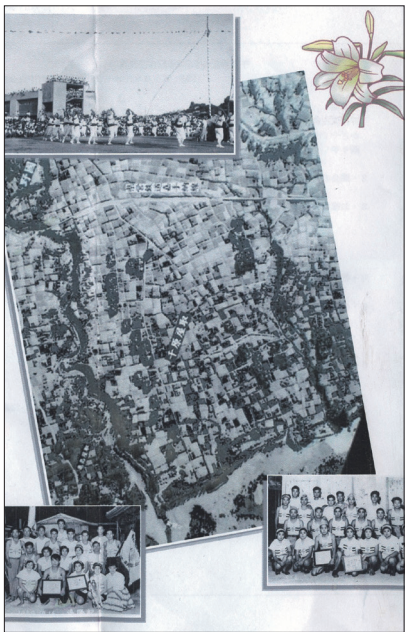
（嘉手納基地返還にこだわり続けた宮城篤実前町長に代わる町長選挙が二〇一一年一月におこなわれたが、候補者の公約は福祉、教育方面に重点がおかれ、基地返還が選挙の争点になることはなかった。）



基地内の飯の拝所（うがんじょ）での奉納エイサー



エイサー保存会会長と次世代をになう子どもたち



50周年式典・祝賀会のプログラム裏表紙（米軍が撮影した航空写真）

11月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

6日
(11月)

話者：Jyotindra Jain（インド視覚芸術センター所長）
三尾稔（国立民族学博物館 准教授）
話題：【企画展関連】インドのポピュラー・アートの発展史
場所：企画展示場A 入口

13日
(11月)

話者：平井京之介（国立民族学博物館 准教授）
話題：北タイの農村と工業団地の20年
場所：東南アジア休憩所

27日
(11月)

話者：佐々木史郎（国立民族学博物館 教授）
話題：【特別展関連】ヨーロッパのアイスコレクション
場所：特別展示館

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
- ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
- ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

1日の調査をおえ、ストックホルムのあるカフェーのテラスで、行きかう人びとを眺めていた。目は自然と女性の方に行ってしまうのだが、足の運びが日本とは違うことにあらためて気がついた。つま先まで伸ばし颯爽と踏みだす足に腰とからだがついていくような歩行は、膝を伸ばしきらず小股で歩く日本とは確かに違う。とはいえこの違いは人種的なものではないようだ。明らかに中国人とわかる観光客はここでも日本人を凌ぐほど増えたが、老若を問わず、背筋をたて足を伸ばして歩く様子はむしろこちらの人に近い。日本のはやりの少女チームの踊りをチキンダンスと評した人がいたが、韓国のチームとの歴然とした差もひよっとすると足の使いかたという深淵なところに起因するのかもしれない。本特集号で野村氏は足の機能は人を運ぶことのみに退行しつつあるのではという説を紹介している。その基本的な機能にまでおよぶ文化的差異は車社会とグローバル化のなかでどちらに向かうのだろう。(庄司博史)

2011年9月号1ページ目次において著者名を誤って記載しておりました。お詫びして訂正いたします。
「フィールドで考える」(誤) 林麗央 (正) 林麗英

- 表紙：女性用 靴中敷き 地域 中国（ベ一族）
標本番号 H0237585、H0237586、H0237699

次号の予告

特集

ポピュラー・アートって何(仮)

月刊みんなく 2011年11月号

第35巻第11号通巻第410号 2011年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂
編集委員 庄司博史(編集長) 樫永真佐夫 川口幸也
久保正敏 菅瀬晶子 中牧弘允 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一敏
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

